

第4章 総括

第1節 内田(2)遺跡の調査成果

内田(2)遺跡は、平成29年度及び令和元年度の2ヶ年の調査で、旧石器時代から縄文時代後期前葉に至る断続的な利用の痕跡を検出した。遺物出土量は縄文土器片 23,302g、石器・自然礫 20767.3g、土製品 13.5 gである。平成29年度の調査成果は『内田(2)遺跡』(青森県教育委員会 2019)として平成31年3月に刊行しているが、2ヶ年の調査の総括を行うため、概略について再掲し、令和元年度の成果と併せて記載する。

平成29年度

〔旧石器時代〕 ナイフ形石器1点(28.3g)が出土した。剥片やチップなど石器製作にかかわる遺物は出土せず、ナイフ形石器がこの地に遺棄されたのは偶発的な理由であった可能性が考えられる。

〔縄文時代前期・中期〕 土器片が数点出土したのみである。

〔縄文時代後期前葉〕 A区では平成29年度に調査を行った北端部から北東部斜面にかけて遺物が出土し、この時期の土坑3基も遺物分布域に重なって存在する。A区南半では遺物がほとんど出土しなかった。B区では、段丘面縁辺部及び縁辺部から谷地形に続く斜面で遺物が出土し、焼土遺構3基が検出された。また、時期不詳ながら、集石遺構1基(BSX-1)、自然礫集石(BSX-2)などもこの時期の可能性がある。

〔縄文時代〕 縄文時代に属する溝状土坑が29基検出された。

令和元年度

〔縄文時代〕 縄文時代に属する溝状土坑16基が検出された。令和元年度の調査区はほぼ全面が削平を受けていた。遺物は土器71片(514.3g)、石鏃2点(5.0g)が出土した。

旧石器時代のナイフ形石器は、基部に槌状剥離が施され、最終的に彫器として利用されている。ナイフ形石器としては東山型の範疇でとらえられる可能性がある。

縄文時代後期前葉の遺構はすべて平成29年度の調査で検出されたものである。小規模な集落であったと考えられるが詳細は後述する。

溝状土坑の用途は落とし穴とする意見が一般的である。本遺跡では二ヶ年にわたる調査で計45基検出された。下北地域では一遺跡から落とし穴がまとまって検出された例は東通村の前坂下(13)遺跡(青森県教育委員会 1983)の29基が最多で、ほかは若干の遺跡で検出例があるが、いずれも数基程度にとどまっていた。特に田名部平野では検出例がなく、本遺跡の事例は、この地域の縄文時代の落とし穴の実態を示す資料である。

(中村・平山・佐藤)

第2節 縄文時代後期の集落について

本遺跡では縄文時代後期前葉の十腰内Ⅰ式期の遺構が少数ながら検出された。調査区は大半が削平を受けていたため、どのような集落であったのか評価を行うためには若干の検討が必要である。グリッドごとの土器出土量(図23)を見ると、A区北端付近とB区に集中し、ⅢC～ⅢMラインはほぼ遺物の空白地帯となっている。A区からB区北半にかけては削平を受けていたが、A区は大半でト

レンチャーによる耕作が行われており（写真図版1上）、遺物分布の多い北半ではトレンチャー堆積土からも細片が出土した。しかし、南半ではトレンチャー堆積土から遺物は全くといって良いほど出土しなかった。こうしたことから土器の出土状況は本来的な分布をある程度反映していると考えられる。隣接する畑地で遺物を採集できなかったこともその傍証となろう。

一方、遺構については、削平によって掘り込みが浅い竪穴建物跡などが失われた可能性もあるが、削平は耕作土直下に第IV層～第V層上部が露出する程度の深度で、土坑がすべて失われたとは考えにくい。従って、A区とB区の遺構群の間には遺構・遺物の空白域が存在した可能性が高く、土器型式の上からは同時であるが、同時に存在し一体となって機能した集落としてとらえることは難しい。それぞれ散発的に行われた小規模な居住活動の結果であると考えられる。

ここで、本遺跡の縄文時代後期前葉の集落を評価するため、縄文時代中期末葉から後期前葉の遺跡動態をみておきたい。

本遺跡付近では中期～後期の集落として複数の遺跡が知られている。内田(1)遺跡は本遺跡の北方約3km、標高25m前後の台地上に立地する。2群の環状掘立柱建物跡群が検出された縄文時代後期



図23 グリッドごとの土器出土重量（Ⅰ～Ⅲ層）

初頭から前葉の拠点的な集落である。

斗南丘(5)遺跡(青森県教育委員会 2015)は内田(1)遺跡の北方600～700 m、M-1面上に立地する。周囲は削平されていたため集落規模は明らかではないが、竪穴建物跡2棟、土坑3基、焼土1基縄文時代前期末葉、中期末葉、後期初頭各時期の遺物が検出されており、断続的な利用のあり方がうかがえる。酪農(3)遺跡はM-1面を開析する谷を挟んで内田(1)遺跡の対岸に位置する同時期の、やはり拠点的な集落である。酪農(1)遺跡(青森県教育委員会 2016)は本遺跡の北側約4 kmに位置する。M-1面を開析する谷地形に分断された尾根上の斜面、標高10 m前後の複数地点から縄文時代早期中葉、前期末葉～中期後葉および後期前葉の各時期の遺構・遺物が検出されている。居住施設と考えられる竪穴建物跡様の施設が径20mの環状に配置されており、中期末葉～後期前葉にかけて断続的に利用されたものと考えられている。M-1面上に広がる遺跡と一体であった可能性も考えられるが、詳細は不明である。上道遺跡は土取によって消滅したと考えられるが、個人によって収集された遺物の内容(中村 2017・2018・2019)から推して拠点的な集落であると考えられる。最花遺跡(むつ市教育委員会 1978 ほか)は、縄文時代前期から後期初頭の拠点的な集落と考えられる。また酪農(5)遺跡は部分的な調査であるため不明な点が多いが、配石が検出された(橘 1971)。縄文時代中期から後期前葉にかけて、田名部川左岸の段丘上で拠点的な集落が複数展開し、付近の標高の低い地域にも縄文人の居住活動が及んだ状況を見て取ることができる。本遺跡の集落も一連の遺跡動態の中で理解される散発的・小規模な活動の結果であると考えられる。

第3節 縄文時代の落とし穴について

本遺跡では、2カ年にわたる調査で合計45基の落とし穴が検出された。円形タイプのものではなく、すべて溝状タイプに分類されるものである。長軸長は開口部で1 m 79cm～4 m 95cm(平均3 m 31cm)、底面で1 m 98 cm～5 m 19 cm(平均3 m 41cm)、短軸長は開口部で21cm～1 m 3 cm、底面で8 cm～47cm 深さは54cm～1 m 64cmである。両端が膨らむ繭状または鉄アレイ状の平面形を示す1基を除いてすべて細長い溝状を呈する。長軸上の両端の壁が袋状に広がるものが45基中32基を占める。

A区北半では段丘平坦面から沢筋の斜面に多くが長軸を等高線に並行して分布する(①)。ただし、斜面下方には分布しない。南半では沢筋が調査区東側へ続くためか、東側に偏って分布し西側が空白域となる(②)。調査区の東西を刻む谷は現在の農免道路付近を分水線とすると想定され、この付近に直交・平行両者が分布する(③)。BSV-10～12が湧水のある地点を取り囲むように分布する(④)。BSV-1・5～7・13、BSV-4などは等高線の張り出し部に位置し、長軸が等高線に直行する(⑤a・⑤b)。湧水池点に続く動線を意識したものと考えられる。全体として本遺跡の落とし穴の配置は沢筋での動物の行動を意識した配置となっていると考えられよう。

落とし穴が意図的に配列されているとみられる例はしばしばあるが、意図的な配列を可能ならしめる前提として、植生を意識しておく必要がある。森林環境では根を除去する工程が必須となり、不可能または極端に労力が増え現実的ではないと思われるからである。土壌学・地質学・古環境学などの分野では、黒ボク土は上方へむかって形成されること(山野井 1996)、黒ボク土を形成する主要因が微粒炭であること(進藤ほか 2003)、微粒炭の起源物質が草本植物であること(石塚・河室・南 1999)、黒ボク土が草原環境で形成されたこと(岡本 2005)が明らかにされるなど研究が進展して